
魚ガール！

あくた咲希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚ガール！

【Nコード】

N6194Y

【作者名】

あくた咲希

【あらすじ】

俺が出会ったのは、魚をこよなく愛する少女だった。そんな彼女と洞穴で見つけた変な生物、彼女曰く「ティクタリック」。ティクタリックは、魚類と両生類のミッシングリンクだというのが……？

（連載全4回）

運命の出会いというものを、俺はそれまでついぞ実感したことがなかった。

――、が。

少し前を歩く女の子が、ショルダーバッグのポケットからハンカチをとりだしたとき、はずみで落っこちたそれに、俺は何気なく目をとめた。

本当に何気なく、だったんだ。たとえばポケットティッシュだったら、そのまま素通りしていたに違いない。拾ってあげるなんてアクシオンは、初対面の人限定だが極度の人見知りである俺にはありえない。

そんな俺が、歩みを止めて、しかも腰をかがめてまで拾った、彼女の落し物。歩道のアスファルトから浮き上がるようなそれは、蛍光色のオレンジと黄色がまばゆい、親指の先ほどの大きさの玉ウキだった。

「あ のっ！ 落としましたよ」

ほとんど勢いで声をかけていた。こんなことは初めてだ。振り返った彼女と何を話したらいいかとか考えずに、よもやとびきりの美少女だったらしいなあとか期待することもなく、ただ、反射的に呼び止めた。

だから、

「ありがとうなのだうお！」

とかなんとか、よくわからない音が語尾についたお礼の言葉が真夏の日差しとともに飛び込んできても、即座には対応できなかった。「うっかりここに入れたままだったんだあ。拾ってくれてありがとう」

「……、うお？」

「やだあ、うお、なんて言っていないよあ」

女の子は手をひらひら振りながら照れて笑うと、落っこちそうに

大きな目をくりくりさせて俺を見上げた。

メバルみたいだなあ、と俺は彼女を見つめ返しながら思った。メバルはカサゴ目フサカサゴ科、この春先の堤防でもたくさん釣れた魚だ。さすがにあそこまで目は飛び出ていないけど、女の子はそれぐらい印象的な目をしていたということだ。

「ん。この匂いはっ」

女の子は小さな鼻をひくつかせて、俺の胸のあたりを嗅いだ。

俺はというと、異性とここまで接近したことがついぞないので、すっかり硬直しきっていた。

「海の近くに住んでるの？ 魚屋さん？ それとも、釣りキチさんかなあ？」

その通り釣りキチです、と答えようにも声が出ない。

女の子は玉ウキをバッグの中のポーチにしまい、

「わたし、引越してきたばかりなんだ。もし釣りをする人なら、ポイント教えてね？」

そのあと自己紹介をしたような気がするが、俺はすっかり聞き逃していた。かわりに、彼女の髪が身動きのたびに揺れるのとか、ほんのり色づいた唇がカワハギみたいにちっちゃいなとか、ほっぺたがつるつるしていて手触りよさそうだなとか、考えていた。

やがて、反応のない俺に愛想を尽かしたらしく、女の子はじゃあねと苦笑して、曲がり角に姿を消した。通りすがりのおじさんが、でかい図体で道の真中にしゃがみ込む俺に、憐れみの視線を残しつつ去っていった。

……異性の釣り仲間ができようかってのに、俺は！ 俺は！！！
情けなくて涙が出た。がっくり頂垂れる。

なんて名前の子だったんだろう。どこに住んでいるんだろう。このあたりなら同じ高校かもしれない。とはいえ夏休み中だから転入生がいるかどうかかわからないし、隣町には私立のお嬢さん学校だつてある。そもそも中学生かもしれないし。

人生初ともいえる——しかも俺の十六の誕生日目前、神様のプレ

ゼント的な「出会い」を不意にしまった俺は、予定していた夜釣りに出かける気力もなく、タオルケットにぐるぐるくるまって早寝した。

そして、夢を見た。タイやヒラメが舞い踊る、竜宮城の夢。

巨大メバルに腰掛けた乙姫様は、俺に「大事な玉ウキを拾ってくれてありがとうなのですうお」などと言い、紐のゆるんだ玉手箱をよこした。玉手箱は受け取った瞬間にたちまち白い煙を立ち上らせ、竜宮城を包みこむ。

煙が立ち消えるのと同時に、俺の前にあったものはすべて消え失せてしまった。

意外にも目覚めは悪くなかった。網戸越しに差し込む光は白く眩しくて、今日もいい天気だと告げている。

シャワーをさらっと浴びて着替えて、南向きの勝手口から外に出ると、磯の風がふんと香った。潮だまりで繰り返される生物の生と死と、打ち上げられた海藻の匂いだ。俺は赤ん坊の頃にここに流れついて（とはまあ、ふつうに考えて母親の作り話だ）、十六になる今の今まですつと海男である。

うちの家系はずつと漁業にたずさわっていたらしいが、俺が物心つく時分にはすでに一般のサラリーマン家庭だった。ひいばあちゃんとはあちゃんだけが、シーズンに岩海苔を集めるぐらいなもの。岩海苔は、卸先の道の駅では人気らしい。

ここらでまだ漁師をやっているのは、目前に広がる海の右側に突き出した、小さな岬を越えたところの数軒のみである。みんな老齡なので、俺や近所の若いモンが時々手伝いにいく。跡を継ぐかといえは別の話だが、この界隈から漁業がなくなるのは寂しいと思う。潮風に吹かれながら、ごろごろした石と砂の坂道を駆けおりる。

左手が砂浜になっていて、右手が磯だ。俺は磯を目指して歩く。履き古したビーサンはこなれていて、ちつとやそつとでは滑らない。軽やかな足取りで、岩に囲まれた潮だまりにたどりつく。

フジツボがくつついた平たい岩にしゃがんで、透き通る海水をのぞき込んだ。まだ太陽に照らされていない、静かな箱海——このお気に入りの潮だまりを俺はこう呼ぶ——がそこにあった。貝殻のかけらや、ちびハゼなんかを抱き込む細かな底砂に、珍しい漂着物が混じっていないかどうか確かめるのが引き潮の日のならいである。こここのところハズレつづきだったから、誕生日の今日こそは何か面白いものが見つかるかいいと思った。

期待しつつ、そつと水に手をひたした。ハゼたちがぱつと放射状

に逃げてゆく。砂の中を探ってみる。水がふわあと白く濁る。

指先にころんとしたものが触れて、砂ごとすくい上げてみた。指の隙間から水と砂が流れ落ち、てのひらに少しの砂と、それが残った。

蛍光色のオレンジと黄色の、親指の先ほどの玉ウキである。

正直よくあるウキだし、これまでも流れついていることがあったけれど、今日の俺にはもはや昨日の女の子しか連想できなくて、ウキを握り締め、すぐさま踵を返した。

釣り好きな子なら、町の釣り道具屋を張っていれば会えるはずだ。海岸の町なので店は多いが、釣りキチの俺にとってはどこも顔なじみである。活き餌の仕入れ状況を訊くついでを装い、さりげなく来客の顔ぶれを尋ねればいい。

家に戻り身支度をして、駐車場のシャッターを開けてチャリンコを引っ張り出してきた。いつもは歩きだが、店をハシゴする以上チャリのほうが好都合である。うっかり買い物をしてしまいかもしれないし。

段切り替えもついていないママチャリは、埃をかぶってダサさMAXだ。ぼろ布で適当に拭いてからまたがる。ペダルを踏むと、最初はじやりじやりと危ない音を立てていたが、そのうちに気にならなくなった。

少し前に舗装された道はすこぶる快適だった。歩いているとわからないが、坂道で受ける風は、排気ガスが混じっていなければなかなかのものだ。

しばらくは海岸沿いを走っていたが、やがて右に折れた。畑の間の砂利道を抜けると、アーケードの入り口が見えてきた。早い時間とはいえさびれた商店街に人通りはなく、チャリンコで疾走しても咎める者はいない。

途中、昔は三軒あったうちの一軒の、老舗の釣り道具屋をのぞいた。

いかついオヤジが奥の座敷でたばこの煙をくゆらせている。死ん

だじいちゃんの友達で、俺は小さい頃から出入しているから平気だが、まず一見の客は引き返してしまう。昨日の女の子も例外ではないだろう。もとより、こんな繁華街から外れたところにある店になど、引越してきたばかりの人間がくるはず——な、い？

「あ」

「あ」

見事に同時だった。

重なつた声に、オヤジが太い眉を片方つり上げた。

「よう、二見の小倅」

「こんにちは」

挨拶もそこそこに、仕掛けやらハリスやらが陳列された棚の前にちんまりとたたずんでいた女の子のそばに寄った。彼女は俺を覚えていてくれた。

「昨日の、オイスターくん」

そう言つて、肩をすくめて笑った。

「オイスターって？ 牡蠣？」

「無口な人って意味。こないだ辞書で見たの」

「昨日はごめん、無視してたわけじゃないんだ」

「うん、緊張してくれてたのよね」

図星を指されて、俺は顔に血がのぼるのを感じた。

女の子は大きな目を垂れて、

「わたしは津々井可南。つづいかなちっちゃい頃から魚が好きで、釣りも数年前からはじめたの」

おそらくあだ名は「さかな」かなんかだろうな、と俺に思わせるのにはじゅうぶんな自己紹介だった。小柄な彼女は、俺を見上げて口をすぼめる。今度は俺の番だ。

「俺は二見甲斐。ふたみかいあっちの海辺に住んでるんだ。よかったら、これから釣りにいく？」

平静を装っていたけれど、実は背中汗だくだった。

女の子を、つ、釣りに誘ったー！

「うん、行く行く！」

可南は顔をほころばせ、ぴよいと跳ねた。

ちよつとサイズがでかすぎてバランスが悪いかなと思っていた目も、見慣れるとすぐかわいい。うわ、俺、恋しちゃってるかも？ふと気づくと、どぎまぎしている俺をじとーっと見つめる視線があった。店のオヤジである。たばこを灰皿に押し付け、座敷を降りてきた。

「昨日から東の波止でイワシが群れとる」

オヤジはエサ釣りの棚から、パッケージをひとつかみ抜き出し、可南に渡した。

「アミは外に置いてある。釣り方はこいつが教えてくれるだろ」

そう言くと、またさっさと奥に引っ込んでしまった。代金を受け取る気配はない。女の子の来店が嬉しかったのか、気前のいいことだ。

俺たちはオヤジの後ろ姿に向かって、ありがとうを言った。

「よし、とりあえず竿とか取りに帰らなきゃ。チャリの後ろ乗って」

店の入り口で備え付けのポリ袋に、大量のアミエビをコンクリートブロックみたいに固めて冷凍したやつを二つ入れながら、まだ店内をきよるきよるしている可南に声をかけた。

「あ、えつと、わたし竿を買わなくちゃ」

「引越して持ってこなかった？ いいよ、俺の貸すよ」

「えと、アミはどこ？」

「アミはもう入れたよ」

「どこ？」

「どこって、これ？」

冷凍アミの色である、ピンク混じりの生臭い水がしたたるポリ袋を掲げると、可南は目をますます丸くした。

「それがアミなの？」

「え……うん、アミアビ」

「エサのことだったのかあ」

可南は感心したようにこちらに歩いてくる。

そうか、アミ↓網か。

釣りで使う網といえばタモだ。俺のは、じーちゃんが使ってたやつを補強して、さらに柄を足したオリジナル品である。根性の入った釣り人はタモを自作するものだ。

「ちっちゃいんだねえ。これ、針につけられるの？」

「いや、これ撒き餌だから……。もしかして、サビキやったことないんだ？」

「サビキ」

はっとして、可南は手元のパッケージを見た。でかかど「サビキ」と書いてある。釣り針に、魚のエサを模した薄い緑色のビニール片がくっついたシロモノだ。

彼女の様子からすると、やはりサビキ釣りをしたことはなさそうだ。そりゃ、場所によって釣れる魚は違う。俺は釣りキチでも海釣り専門で、ブラックバスやアユなんかは狙ったことがない。だから、サビキを知らなくてもおかしいことではない。

しかし、可南はひどく恐縮したらしく、

「あの……、ごめんね？ わたし、自分でエサもつけられないの」
とくに珍しいことでもないだろうに、もじもじして俯いた。

「お父さんが誰かと釣りに行ってたんだろ？ うちの従妹もそんなだよ」

従妹の場合は、まさに「魚を釣る」だけの「釣り」だったが……。ひとりきりで釣り道具屋にくるぐらい、やる気があるのだ可南はそこは、誇っていいところだと思うぞ？

「俺、一通りの海釣りのことなら教えてやれるから。元気出していこう」

「ありがとう、なの……」

せっかく笑顔が戻りかけたのに、可南はまた俯いた。

今、また、語尾に何かつけようとしなかったか？

昨日もごまかしていたことからすると、本人は隠したがっている

ということか。方言とは思えないけど……、追求しないほうがいいのだろう。ふだんはふつうの言葉でしゃべっているのだし。

可南を荷台に乗せて、きた道を引き返した。

風に潮の香が混じりだすと、後ろで可南が深呼吸をしたのが感じられた。控えめに俺の胴体に腕をまわしている。ちらと振り返ると、彼女の黒髪が乱れ、なびいているのが見えた。薄手の長袖パーカーのフードがふにやふにやしている。スカートの裾もはためいて、太ももが見えた。その後の上り坂は根性でクリアした。

玄関前の生垣のそばにチャリンコを止め、可南に陰で少し待つよう言い置いてから家の中に入る。両親は仕事でいないが、ひいばあちゃんとはあちゃんが窓を開け放した居間でくつろいでいた。俺を目ざとく見つけると、すかさず声をかけてきた。

「甲斐やあ、こっちきておまんじゅう食べんかね」

「甲斐、弁当あるで、持っていきや」

ひいばあちゃんとはあちゃんは血が繋がっていないが、性格がおっとりしているところが似ていて、仲がよい。近所の人でさえいまだに、嫁姑の関係でなく本当の母娘だと勘違いしていると思う。

朝めしを食べていなかったことを思い出して、ひいばあちゃん定番の蒸しまんじゅうをひとつ口に放り入れた。いつ作った品かわからないので、可南に持っていくのはやめておく。

ばあちゃんの弁当は台所のテーブルに置いてあった。今日は包みがふたつ。ばあちゃんとはときどき昔の癖がでて弁当をふたつ作る。

俺のと、死んだじいちゃんのぶんだ。かつて夏休みといえば、じいちゃんと日があくことなく釣りに行ったもので、いつもばあちゃんの弁当を持参していたのである。

じいちゃんのぶんは、いつもなら海べりの墓に備えたあと、俺の胃袋におさまるわけだが、今日は可南がいる。ばあちゃん、グッドタイミング。知り合ったばかりの可南をいきなり墓参り付き合わせのも悪いけど、うちの墓は東の堤防に行く途中にあるから線香だけあげていいつ。

冷蔵庫から塩水で作った氷と、ペットボトルのお茶を出して、常に台所にスタンバイしているクーラーボックスに入れた。俺愛用ナイロンのボディバッグには、弁当と紙コップ——はどこにあるかわからないので、食器棚にあったプラスチックコップをふたつ持っていくことにする。

「ばーちゃんズに行つてきますをして、俺は外に出た。待つていた可南と目が合うと、彼女はホツとしたように駆け寄つてきた。

「ごめん、もうちょっと待つてな」

釣り道具は出しっぱなしにしていると叱られるので、毎日律儀に庭の物置の中である。可南もついていくというので、一緒に駐車場の裏にまわる。

「か——津々井さんは、軽いのがいいかな」

竿を物色しながら呟いていると、

「可南でいいですよー。同い年ぐらいでしょ？ 高校生？」

尋ねられたので、高一の十六歳だと答えた。案の定、可南も同じ学年だった。

彼女はリール付きの竿を扱ったことがないらしいので、伸ばせば二メートル弱の延べ竿を選んだ。ちよつとした釣りならコンパクトなものの方がいい。俺も同じぐらいの長さのにした。こちらはリール付きである。

さて、ひとりなら歩いていくところだが、今日は荷物をチャリに乗せたり、くくりつけたりして、ようやくの出發となった。

ぎらぎら照りつける太陽光のもと、俺たちはチャリを真ん中にして歩いていく。東の波止までは三十分かかるか、かからないかである。途中で漁港を通り過ぎ、墓参りをして、おか陸側に小高い山を仰ぎながら歩いた。

そのあいだ、ずっと可南の話を聞いていた。まさに「さかなちゃん」だ。魚を愛でるのも、食すのも、育てるのも好きらしい。俺はといえば釣る魚以外にはそんなにも興味がなく、横文字の魚名を聞いてもピンとこない。それでも可南はめげることなく、その魚のこ

とを的確に表現するのだった。

波止には、平日とはいえ夏休みなので、けっこうな数の釣り人がいた。年齢分布は極端で、若者と年寄りのみ、である。昔の俺とじいちゃんみたいな組み合わせがそこかしこで見られ、懐かしい、ちよつと淋しい気分になる。

じいさんが釣り上げるキラキラした小魚たちを見て、こどもたちが歓声を上げた。バケツを覗き込んで動かないこどももいる。すぐ食べたい、なんて言い出すやつもいる。慣れない手つきで竿を扱っていたり、ちびっちゃんイワシでも大騒ぎしながら両手でつかんだり、うつかり海に逃がしてしまつて悔しがったり、しきりに数を数えて自慢していたり。これだけ賑やかな釣り場はサビキの時期ぐらいなものだ。少々こどもたちがうるさくしていても、逃げるような魚はいない。怒る大人もいない。

可南は珍しいものでも見るように、目をまんまるにしてキョロキョロしていた。沖合にフェリーを見つけて俺に教えてくれたり、幼稚園児らしき男の子がいったに釣りをしていると感心したり、海面が魚の群れで銀色に波打つのを幻想風景でも眺めるかのように見つめていたり、こちらがなんだか得意げになつてしまつりアクシヨンの数々だった。

「本物の海を見るのは初めてなの」

俺が勧めた折りたたみ椅子に腰掛けながら、可南ははにかんだ。すべて用意のすんだ竿を受け取ると、片手で三連の仕掛け針をつけた部分のハリスをつまんで、ひょいっと海に向かって投げる。それがぱちちゃんと海に落ちると、またたくまに小イワシが食いつきにやってくる。

可南は慌てながら竿を上げ、引き寄せた。銀ばかりする魚たちが、彼女の顔にびちびちと水しぶきを飛ばした。

「あはっ、すごいすごい」

底抜けの笑顔になつて、可南は三匹のうちの一匹を素手でつかもうとした。てのひらに細かいウロコを残して、つるりと逃げる魚に、

また笑う。

「今んとこアミ撒かないでも釣れそうだな」

俺はぼろ布で小イワシをつかみ、魚の口を刺している針を外してクーラーボックスにぽんぽんと放り込んだ。こんなにすぐ釣ってしまうとは思わなくて、まだ海水を汲んでいなかった。ロープ付きの釣り用バケツを海に投げ込み、すくった海水をクーラーボックスにそつと注ぐと、跳ねていた小イワシがすぐに動かなくなった。釣った魚はこうして締めて、鮮度を保つのだ。

その後も入れ食い状態で、俺は自分の竿をだすどころではなかった。可南が楽しそうにしているので、途中で代わるよーと言われたが辞退した。彼女自身も遠慮はしつつ、爆釣りの快感に酔いしれているようだった。一口サイズの小イワシでも、いっぺんに数匹釣ればそれなりに手応えがある。

せつかく釣り屋のオヤジから貰ったアミをどうしようかと考えていたら、隣のこどもがアミを入れたバケツを海に引っくり返してしまった。悪気はなかったんだよな、俺もやったことあるんだよなあ、とほろ苦くなりながらうちのを一袋、押しつけた。泣きべそをかきながら、じいさんに礼を言わされているこどもがいじらしい。

休憩もせずに釣りつづけていたら、昼にはもうクーラーボックスがいっぱいだった。周りでも帰り支度をする釣り人がちらほらいた。みんな大漁で顔がほころんでいる。可南も、

「これ、まるごと食べられちゃうよねっ！ さばくの手伝うお」

上機嫌で、妙な語尾をつけたことにも気づかない。魚の、「うお」だよな？ もしかして、そういうキャラを目指しているのだろうか？

後片付けをして、クーラーボックスの底から水を抜いて肩からかけた。かなりの重さだ。日焼け肌へのストラップの食い込みが半端ない。

波止をあとにして、弁当を食べられる日陰を探した。きた道を戻り、山のふもとに少しひらけた場所を見つける。人為的な古い横穴がいくつかあり、怪しい雰囲気ではあったが、その手前の野っ原は

綺麗だった。クロマツが何本か植わっていて、その陰に俺たちは腰をおろした。

「本当にわたしがいたでいてしまっていていいの？」

どでかいおむすびが二個とたくあん、玉子焼きだけの弁当に可南は感動しきりで、そんな弁当をごく当然のものとしか捉えていなかった俺は、考えを改めなければいけないと思った。死んだじーちゃんを懐かしむように、いずれこの弁当を恋しがるときもくるのだろう。年のために味覚障害が起こりはじめたばーちゃんの玉子焼きはしょっぱすぎて、うっかり涙腺が刺激されそうになる。

俺が弁当を平らげる頃、可南はようやくおむすびを一つと、二切れのたくあんを食べ終えたところで、しみりとした雰囲気であぐらなつたお茶をすすっていた。

「わたし、こっちの学校でうまくやっていけるかなあ」

聞けばやはり、俺と同じ高校に転入してくるそうだ。お母さんのお母さん、つまりおばあさんの具合が悪いらしく、その介護のため引越してきたらしい。

「甲斐くんと同じクラスだったらいいな」

「そそうだな」

思わず舌を噛みそうだった。そんなことを女の子に言われたら、誰だって焦るんじゃないか？ 同じクラスがいい——なんて。深い意味はないだろうけど、それでも頼ってくれているのだから悪い気はしない。

「うちの学校、二クラスしかないから確率半々だしさ。もし別になつても合同授業が多いし。すぐ慣れるって」

元気づけてみる。可南はちょっと癖はあるけどカワイイ部類だし、うちは男子の割合が多いし、女子ウケはどうかしらないけど、ふつうに暮らしていくぶんには大丈夫だろう。女で釣り好きっていうのも、この町じゃ珍しいわけでもなし。

しかし可南は苦い顔をして、小さく唸った。

「わたし、ね……。変じゃ、ないよね？」

「変？ 何が」

「その……」

言いにくそうにしている。何かとんでもない秘密を抱えているの
だろうか。それか、トラウマか。

トラウマ……、か。俺はいつも「磯くせえ」とか「さかな小僧」
とか口さがないやつらに言われていたから、初対面の人間に会うと
きはひどく緊張する。いたってふつうのつもりだが、周りから見た
らどうなのだろうと鬱になるときがある。

くわえて俺は体がでかい。正しくは、ここ数カ月で一気に伸びた。
もう誰も俺をいじめようってやつはいないが、かわりに女子に恐ろ
しがられるようになった。最近のあだ名は「海坊主」である。ちょ
っとおしゃれに目覚めて髪の毛を逆立ててみたら、上級生にまでビ
ビられた。

「あー……、俺とつるんでたら、友達できない……かも」

自分で言いながら凹みそうになる。漁師のおっちゃんとか釣り道
具屋のオヤジとか、そういう知り合いなら増えるけど。あと、ばー
ちゃんの友人とかな。

すると可南は、玉子焼きでむせながらのたまった。

「甲斐くんが、友達に、なってくれるなら、ほかに友達いなくても、
平気」

う、あ。これ、どう反応したらいい？ 喜ぶべき？ ほかにも友
達つくれと諭すべき？ それとも、どうしてそんなに謙虚なのかと
問いただすべき？ いったいどんなトラウマ抱えてるんだ。

俺が返答せずにいると、可南は二個目のおむすびにかじりついた。
そのまま米をかじり取るでもなく、拗ねたような視線をこちらへ向
けてきた。

俺は慌てた。

「じゃ、じゃあ俺は友達一号ってことで！ よろしくなっ」

できるだけ明るく言ってみたつもりだ。

が、可南は何かしら不満だったようで、無言でおむすびを食べつ

づけた。

沈黙の時間が流れる。ヘタに何かを言うより、静かにしていたほうが得策か。

俺は伸びをして、草っ原に寝転がった。マツの尖った葉の向こうを、厚く白い雲が流れている。一羽の鳥が時々、甲高い声で鳴きながら、大きく空を旋回する。

身近すぎる海を見て思うことはないのだが、広い空を眺めていると自分の存在の小ささを考えることがある。自分以外の人間のも。俺たちは小さくて、手の届かない空を当然あるものとして日々を生きている。空は本当にそこにあるって、確かめたことなんてないのに。

俺は寝返りを打った。草の匂いが鼻のすぐそばにあって、むせた。むき出しの肘を、やわらかな地面が受け止める。頬杖をつき、なんとはなしに横穴のひとつをじっと見つめた。

ふと、横穴で何かがつごめいた気がした。人ではない。もっと小さな、何か。

「……どうしたの？」

怪訝そうに可南が見下ろしてきた。弁当は平らげたらしい。タッパ―を布巾で包み直し、ごちそうさまと言う。

「なあに？ あそこ？」

俺の視線をたどり、いともたやすくソレを見つけた。そして、「テクターリク……？」

不思議な言葉を発した。俺にはとつさに反芻できない単語で、ぽかんとする。

可南はひどく機敏に立ち上がり、ソレに向かって走り出した。遅れをとった俺だが、なんとか途中で追いつく。

横穴は、可南ならば腰をかがめることなく入れるだけの高さがあった。ソレはもう入り口付近にはおらず、正体を突き止めるには暗い奥へ進まなければならなかった。

躊躇する俺たちを急かすように、背後から風が吹く。

「いきましよう」

押し殺した声で可南が言う。ものすごく思いつめた横顔である。よっぱどそのティクなんとかというものが重要なのだろうか。俺に「見間違いか気のせいなんじゃ」と言わせない気迫に満ち満ちている。

日が高いぶん、横穴はいくらも行かないうちに光が届かなくなつた。そう深くないはずだが、ちびちび進むせいでなかなか行き止まりにぶつからない。

ほとんど視界がきかなくて、息が詰まり、いつのまにか可南が俺の手を握っていたことにも気づかないほど俺は緊張していた。そのくせ、サンダル足が何かくぐにゅつとした弾力のある何かを踏みつけたことは、稲妻のごとく全神経を戦慄させた。

「うわわわわ」

みつともなく慌てて、その場を飛び退こうとして失敗すると、可南も一緒に尻もちをついた。己の情けなさに、謝る言葉すら出てこない。

先に可南が起き上がって、俺を引っ張った。

「いま、水の音がした」

暗がりに慣れた目で見上げると、彼女はその顔に笑みを浮かべていた。興奮した、ニヤリという擬態語が似合う類の笑みだ。

もはや横穴というより洞穴といったほうがいい。近所にこんなところがあるなんて知らなかった。入り口になんの立て看板もなく、柵もなく、うっかり入って迷子になることもいそいだなこれは。

さらに奥を見つめたまま、可南は俺をつかむ手に力を入れた。彼女としても気は逸っているようだが、まったく恐ろしくないわけではないらしい。

男の俺が尻込みしてどうするんだ、と自分で自分を鼓舞する。手を握り返し、覚悟を決める。

数歩も行かないうちに水たまりにさしかかった。深くはない。くぶしあたりを水面がくすぐり、外の日差しであたたまっていた体

をじわじわ冷やしてゆく。潮の匂いはしない。これは真水だ。湧き出しているというよりは、雨がたまったかどうかしたんだろう。

今度は踏みつけはしなかったが、また足が何かに触れた。

ソレは緩慢な動きで水中を徘徊しているようだ。そうつと、サンダルからのぞいたつま先でなぞってみる。かなり、でかい。そして、どうやら鱗らしきものがある。

魚か、と思うと、少し安堵した。しかしすぐに、先ほどソレを踏んづけたのは水中でなかったことを思い出す。

「いや。いやいや。同じやつだとは限らないし」
「いたの？」

可南が、俺の足元を覗き込もうとした。

時を同じくして、恐らくその魚と思われる物体が、俺のスネにかみついてきた。ガブリとやられた。目視できないが、かなり、でかい口であろうと思われる。

声にならなかった。

俺はソレを左足にくつつけたまま、可南の手を引いて洞穴の外へ全速力で引き返した。

日のもとで見たソレは、魚っぽくはあったがとても魚とは思えないシロモノ、謎の生き物だった。俺は今度こそ悲鳴を上げた。

「甲斐くんー！ 落ち着いて」

そういう可南もおよそ冷静ではなく、ぱくぱくと口を動かしてはソレと俺とを見比べた。ソレはまだ俺にかじりついていて、きつとスネには血が滲んでいると思う。早く引きはがさないと食いちぎられてしまいそうだ。

決死の覚悟でソレの胴体に手刀をくらわした。しかし、厚い鱗にいと簡単に弾き返されてしまう。両手でつかんで力任せに引き離そうとしても、俺が痛いだけでびくもしない。

ああ俺もここまでか。死を意識してボンヤリしていたら、可南が拾ってきた枝を俺の足とソレの口の隙間に差し込み、えいやつと斜めに倒した。テコの原理でソレは吹っ飛んでいき、草の上にごろん

と横たわる。

「あ、ありがと可南」

なけば放心状態で俺は礼を言った。

だらだらと流れる血がサンダルを通り越して地面を濡らす。とりあえず、イワシの鱗や血が染み付いたボロ布で傷口を押さえた。熱気の中、匂いが入り交じってすごいことにんり、思わず咳き込む。

可南はといえば俺を放ったらかしで、草むらにしゃがみこみ、メートルは余裕であろうかという深緑と茶を混ぜたような色の物体を熱心に見つめていた。こちらには気づいてくれなさそうだったので、血が止まったところで俺も可南の隣へ行き、腰をかがめる。

見れば見るほど正体不明な生き物だった。頭は扁平で、ワニみたいな口をしている。首から下は鱗があつて魚のようだが、もったりとしたヒレが二対、まるで足のように生えている。言うなれば、胴体部分と足だけが魚のワニだ。

「ティクターリク？　ほんとに？」

可南が恐る恐るソレの横っ腹をつつき、またティク……と呼んだ。外国の魚だろうか。俺が頭の周りに疑問符をいっぱい浮かべていると、可南がようやく説明してくれた。

「ティクターリク・ロゼアエ。デボン紀後期に、はじめて陸に上がったとされる魚」

「デボン……紀。それって、かーなーり、大昔のことじゃ」

俺の記憶が正しければ、地質時代の古生代、カンブリア紀↓オルドビス紀↓シルル紀↓デボン紀。恐竜が現れる中生代よりも前の時代だ。

「うん。魚類の時代とも呼ばれてる頃のことね。その終わりあたりに、ティクターリクという生物が出現したらしいの。化石が見つかったのはここ数年の話」

可南は抱いた膝に顎を乗せて、唇を尖らせた。

「それがこんなところにいるなんて、変よね。魚類と両生類の貴重なミツシングリンクが現代にいるなんて」

魚だけでなく進化の過程にまで詳しいとは驚きだ。俺なら舌を噛みそうな単語をよどみなくしゃべり、真剣に悩んでいる。

そのティクターリクとやらは、ぐでんと寝そべったまま動かなかった。呼吸はしているようだ。ぶっ飛ばしたのは致命傷にはなっていないと思う。

とりあえず、流血沙汰を引き起こす危険生物なのは間違いない。放置しておいていいはずがない。

「保健所かどこかに連絡するか？」

可南に訊いてみた。彼女は一瞬、何がなんだか分からないといった顔をした。少しして、

「ホケンジョ。あ……保健所、か」

思ってもみなかったらしい。眉をしかめて渋い表情になる。

「わたしは、いやだな」

ポツリと言った。ティクターリクの背をそうろと撫でて、大きな目を細める。慈しむ目だ。手つきも非常にやさしい。

やがて、可南は俺を見上げた。潤んで、とろけそうな目で。

いやな予感がした。

そしてそれは的中する。

「この子、わたしたち二人の秘密にしよう」

二人だけの秘密は嬉しいが、これは、ちょっと、いただけない。

「ね？ 甲斐くん、お願い」

そんなふうに手を握ってお願いされても、素直にうなずけなかった。

このティクターリクを飼うということか？ どこで？ どうやって？ 今回、噛み付かれたのが俺だったからまだよかったものの、可南だったり、小さなこどもだったりしたらどうだ？ 女の子の肌に傷が残るのも大変だし、もしかしたら命に危険がふりかかる可能性だってある。毒がないともわからない。俺、数時間後に死ぬかもしれない……。

そんな生物を果たして俺たちの秘密にしてよいものかと迷った。

そのうちに伏せていたティクターリクが身じろぎし、のっそりと四つのヒレで体を持ち上げた。首を傾げるようにして、可南と、俺とを観察するふうな仕草をする。

俺は可南の肩に手をやり、背後に押しやった。ティクターリクと対峙する。

飛び出し気味の目が俺を胡散臭そうに見上げたと思ったら、ふいと横を向いた。そのまま不恰好に歩いて、もしくは這って、元いた洞穴に戻ろうとする。

「あ、行っちゃう……」

可南が呼び止めようとしたが、古生代の生物は振り返りはしなかった。こちらがティクターリクと呼ばうがなんだろうが、自分がなんて呼ばれているかなど彼はついぞ知らないのだ。当然、飼われることだって望んじやいない。

ティクターリクが完全に洞穴の闇に消えるのに、けっこうな時間がかかった。

「さ、帰ろう」

しゅんとした可南を慰めようと、なるたけ明るく言ってみる。弁当包みをボディバッグに詰め込んで背負い、クーラーボックスをチャリの荷台にくくりつける。

「あいつの存在、秘密にしとくから。保健所に連絡したりしないから」

「……うん」

可南は渋々といった感じだったが、歩き出した俺についてきた。

しかし、後ろ髪を引かれている様子なのはよくわかった。ちよくちよく後ろを振り返っては、ほう、と悩ましげなため息をつく。ついさっきまで俺といい雰囲気だったように思えたのに、今や彼女はティクターリクで頭がいっぱいだ。

俺の家に着いても上の空で、釣ってきたイワシはぜんぶ俺が捌いた。てんぷらと南蛮漬けにして、土産に持たす。

「ありがと。じゃ、またね」

可南は心ここにあらずといった調子でふわふわと微笑んで、町へ帰っていった。ばーちゃんズになぜ送っていかないのかと責め立てられたが、俺だってそのつもりだったがやんわりと断られたのだ。

「はああああ」

彼女の姿が見えなくなると、俺は門の前で頭を抱えてうずくまった。携帯番号の交換すらしそびれ、縮まっていたはずの距離がまたあいて。

「せめて今日が、俺の誕生日だってこと言えばよかったな……」

可南から祝福されることは後にも先にもないのだと思うと、とてもなく凹んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6194y/>

魚ガール！

2011年11月24日08時51分発行